

## 5) 菌類

### ①概説

菌類はより正確には真菌類と呼ばれ、①細胞壁を持つ真核生物である、②基本的な生活体は多細胞の菌糸体である、③細胞は単核または多核性である、④栄養摂取は吸収性である、⑤有性的または無性的に形成された孢子によって増殖する、⑥従属栄養生物である（光合成能を欠く）、などの特徴を合わせ持つ点で、細菌類・放線菌類・変形菌類（粘菌類）・細胞性粘菌類など他の近縁の微生物から区別される。従来、真菌類はツボカビ（広義）・接合菌・グロムス菌・子のう菌・担子菌の5門と生活環の一部不明な不完全菌類に分類されていた（日本菌学会（編），2013）。しかし、最近の分子系統学的な成果を反映した分類ではツボカビ門（広義）は解体されツボカビ（狭義）・ネオカリマテイクス・コウマクノウキンの3門に分類されている。接合菌門も解体されたが早くに門として独立したグロムス菌門を除いて所属する門は確立されていない。また、動物として取り扱われていた微孢子虫類が菌類であることが判明し門として新たに編入された。これらにより現在は従来の子のう菌・担子菌の2門を含めた7門が認識されている（国立科学博物館編，2014）が、まだ未解明な部分も多く今後も分類体系の変更が想定される。

菌類の栄養吸収・生長をつかさどる生活体が菌糸（体）、繁殖・伝播の役割を担うのが孢子、その孢子の形成と分散のための器官が子実体である。子実体の形や大きさは菌類の分類群、さらに菌種によって大きく変わり、肉眼的なものから顕微鏡的なものまでさまざまである。そのうち、子実体が肉眼的にも顕著に認められるものをきのこ（大形菌類）、もっぱら顕微鏡観察に頼らざるを得ないものをかび（微小菌類）と総称している。ただ、両者の間に明確な区別はない。

菌類は自然界において生物体あるいは有機物の分解・還元者として重要な役割を果たしている。なかでも、植物由来の有機物の分解・還元過程にもっとも深く関わっている。菌類をその栄養摂取様式から腐生菌（死んだ有機物から栄養分をとる）、寄生菌（生きた植物や動物の体から一方的に栄養分をとる）、共生菌（他の生物と互いに栄養分の授受をおこなう）などに区分することもある。また、きのこ類を生態的な見地から菌根菌（地中で菌糸が生きた植物の根と共生関係をもつもの：バカマツタケ・ホンシメジ・ヤマドリタケほか）、木材腐朽菌（菌糸が落枝・倒木・立木の枝幹・根株などの腐敗や腐朽に関与しているもの：フサハリタケ・シロキツネノサカズキモドキ・シロタモギタケほか）、林内地上生（ホウキタケ・オオズキンカブリほか）、草地生（アケボノタケ・トガリフカアミガサタケほか）、地中生（地中に子実体を生じるもの：イボセイヨウショウロ・イモタケほか）などと便宜的に区分することもある。

本レッドデータブックでは主に高等菌類（きのこ類）を対象としており合計93種が選定された。2010年版から23種が増加しているが、これらは調査協力員らの協力の結果新たに絶滅の恐れがあると判明した種のほかに、環境省レッドリストにおいて選定されている種で県内にも生息している種であるが情報が不足しているもの（例えばマツ枯れ病を要因として選定されている種で近年の県内でのマツ枯れ病の発症に伴い情報収集が必要と考えられた種）など30種を追加したためである。また、2006年の初版における種選定時、県内で発行されている県産目録等により選定したが、その後、標本や文献、写真などの資料に基づいて執筆された青森県産きのこ図鑑（工藤，2017）の出版に伴いその種の実体が不明とされているものや県内では広く分布し絶滅の恐れが無いと判断されたものなど7種について除外した。選定された種はいずれも自然環境の保全・評価上重要な指標になると考えられる。なお、微小菌類（かび・こうぼ）については一般からの生息情報が得られ難く、絶滅動向の把握が困難なため種選定の対象としていない。

（原田幸雄・工藤伸一）

## ②本文

### チャワンタケ目 ピロネマキン科

**A****和名** アカハナピラタケ**環境省：情報不足****学名** *Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi

**【形態的特徴】** 子実体は地中に埋まった塊状の菌組織から有柄の花びら状の子囊盤を形成し、通常径15cm、高さ6cm位。子囊盤は初め一つの基部から多数角状に枝分かれし、成熟して扁平不規則な直立した円筒形となり、先端部分は開いてケイトウの花びら様になる。

**【選定理由】** 青森市内のアカマツの枯木根際に発生しているのが唯一の生息場所として知られていたが、2006年にアカマツの腐食による倒壊後は発生が見られなくなった（工藤, 2017）。他の地域からの生息が確認されなければ消滅した可能性があり、近い将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本種は山形県から初めて見つかった種である（Kobayasi, 1960）が発生はきわめてまれである。本県では初夏および初秋に発生。1994年に青森市で初めて採集されたが、他の地域からの報告はない。ササとの関係が示唆されているが、本県ではアカマツ老木立ち木根際地面に発生する（工藤, 2017）。

**【特記事項】** 本種は *A. heinricheri* (Bres.) Pfister の異名とする意見もある（工藤, 2017）。

**（工藤伸一）**

### ハラタケ目 イッポンシメジ科

**A****和名** タネサシヒメシロウラベニタケ**環境省：該当なし****学名** *Clitopilus scyphoides* (Fr.) Singer f. *omphaliformis* (Joss.) Noordel.

**【形態的特徴】** 子実体はきわめて小型なカヤタケ型をしている。傘は通常10mm以内、初めやや丸山形、のち開いて平らから漏斗状となる。表面は類白色でほぼ平滑であるが多少繊維状～微粉状を呈する。肉は薄く、白色。ひだは柄に垂生し、やや密、狭幅である。初め白色のちクリーム色、成熟すると多少ピンク色をおびる。柄は通常長さ1cm、幅1mm位、中心生または偏心生で、下方に細まり、中実である。表面はやや繊維状で、白色。基部は白色菌糸に覆われる（工藤, 2017）。

**【選定理由】** 国内での発生地は県内の1か所に限定されているが、近年環境の悪化に伴い発生が極端に減少していることから、近い将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 1998年に本県太平洋側に所在する八戸市種差地区の芝生から初めて採集された（工藤, 2017）が、その後ほかの場所からの報告はない。初夏に芝生上に少数群生する。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 場所は公共施設であるが施設利用者の歩行により生息地の芝の損傷が著しい。このことから歩行を制限するなどの対策を講じる必要がある。

**（工藤伸一）**

### ハラタケ目 タマバリタケ科

**A****和名** ヤチヒロヒダタケ**環境省：絶滅危惧Ⅰ類****学名** *Desarmillaria ectypa* (Fr.) R.A. Koch et Aime

**【形態的特徴】** 中～やや大型なカヤタケ型からモリノカレバタケ型のきのこ。傘は淡黄土色で中央に微細な鱗片を密布するが、鱗片の発達が悪く、多少粘性がある。柄にはつばがない。

**【選定理由】** 本種は湿原などに発生する特異な性質を持っており、世界的に発生がまれで、学術的に極めて貴重なものである。本県では、湿地の減少や休耕田の宅地化など開発による生育環境の悪化で、近年発生が減少してきており、近い将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 国内とヨーロッパに分布し、ヨーロッパではアルプスの高山帯や北部高緯度地域の湿原に発生する。日本では群馬県尾瀬から報告されたが（Kobayasi, 1954）、現在、発生が確認されているのは本県と京都府だけである（工藤, 2009）。本県では秋、休耕田のようなヨシなどの茂る湿地や田の畦などに発生する（工藤・長沢, 2003）。

**【特記事項】** 類似種と同じくつばを欠くナラタケモドキ *Desarmillaria tabescens* (Fr.) R.A. Koch et Aimeがあるが、こちらは枯木などに生えることと、傘に粘性がないことで区別がつく。

**（工藤伸一）**

和名 コカンバタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Piptoporus quercinus* (Schrad.) Karst.

**【形態的特徴】** 枯木などの材に発生する中型の半円形～扇形をした褐色のきのこ。傘の裏は管孔状で白色である。地中に埋もれた基質から発生するものではしばしば極めて大型で円形の傘を形成し、中心に黒褐色の柄をつけることがある。

**【選定理由】** 本種は全国的に発生がまれであり。本県では2か所から見ついているが、どちらもその後の発生は確認されていない。生育環境が限定されており、基質の老朽化により消滅するなど、近い将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本県以外では静岡県・鳥取県に採取記録がある（環境省, 2000）が、発生は極めてまれで、分布等の正確な情報は不明である。本県では初秋、ミズナラの枯木上およびクリの根際に発生し、1998年に田子町で初めて採集されたがその後の採集記録はない。また、2010年に新たに十和田市蔦の広葉樹倒木から採集された（工藤, 2018）が、その後の発生は確認されていない。

**【特記事項】** 本学名の菌は、今後分類学的検討が必要であるとされている（工藤, 2017）。

(工藤伸一)

**タマシヨレイタケ目 タマシヨレイ科****B**

和名 チヨレイマイタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Jülich

**[形態的特徴]** 本種はマイタケ型をした株状のきのこであり、複雑に枝分かれした柄の先端に浅い漏斗形の傘をつけ、大型になる。傘の表面は黄白色～淡きつね色で、黄褐色の鱗片を被り、裏は管孔状で柄に垂生する。柄は白色で、地中の柄の基部にはしばしば黒色、ショウガ根状の菌核をつくるが、立ち木上から発生し、地中に菌核を形成しないこともある。

**[選定理由]** 本種は発生環境が限定されており、発生が比較的まれな上に、菌核は乱獲されており、一旦採集されると子実体の発生が途絶えることから、将来県内での絶滅が危惧される。

**[分布と生態の概要]** 本種はヨーロッパや北アメリカ、中国に分布する北方系の菌であり（今関・本郷, 1989）、国内では北海道や本州中部以北などの冷温帯地域に発生し、ややまれである（工藤, 2009）。本県では秋、ミズナラなどの樹下近くの地中の菌核または立ち木などから発生するが、採集例は比較的少ない（工藤, 2017）。

**[特記事項]** 菌核を猪苓（ちよれい）といい、漢方薬に用いられるため乱獲されている。

(工藤伸一)

**ペニタケ目 サンゴハリタケ科****B**

和名 フサハリタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hericum cirrhatum* (Pers.) Nikol.

**[形態的特徴]** 本種は中型のハリタケ型をしたきのこである。傘は貝殻形で、通常数個の子実体が基部で癒着して重なり合う。傘の表面は粗毛状の突起で覆われ、白色～クリーム色、のち淡橙褐色を帯びる。傘裏は比較的長い針状である。

**[選定理由]** 八甲田と奥入瀬の溪畔林内など生息環境が限定されているが、発生がまれであり、近年温暖化など、将来県内での絶滅が危惧される。

**[分布と生態の概要]** 本種は北ヨーロッパやアメリカ西部などで発生が知られているが、世界的にも分布地域の限定された貴重種である。国内では本県以外ではこれまで北海道・宮城県・栃木県・埼玉県・大分県などで採集されているが、発生はまれである。本県では初秋、ブナやサワグルミなどの広葉樹の倒木などに発生し、1990年に八甲田から初めて採集されている（工藤ら, 1998）。

**[特記事項]** 本種は、国内では本県の八甲田から初めて採集された標本に基づいて1992年に日本新産種として報告された（長沢・工藤, 1992）。

(工藤伸一)

**ビョウタケ目 ビョウタケ科****B**

和名 ナガミノクロサラタケ

環境省：該当なし

学名 *Holwaya mucida* (Schulzer) Korf et Abawi subsp. *nipponica* Korf et Abawi

**[形態的特徴]** 子実体は極めて小型の有柄皿状の子囊盤を形成する。子囊盤は肉質で初め碗形からのちほとんど平な皿型となり、通常径5mm程度。縁は外側に屈曲する。多くは中央がくぼみ、全体帯緑黒色。柄は短く円筒形。

**[選定理由]** 本種は本県以外では北海道から知られているが、発生はまれである。本県では最初の採集以来発生が確認されていない。これは近年の温暖化による環境の悪化が一因と考えられ、将来県内での絶滅が危惧される。

**[分布と生態の概要]** 北海道だけから発生が知られていた種であるが、本県では2009年の秋遅く、八甲田の田代平でブナの倒木上から初めて採集された（工藤, 2018）。北海道ではシナノキに発生するという。

**[特記事項]** アメリカのKorfらによって、北海道産のものが*H. mucida*の亜種として報告されている。基本種は、胞子が短く、上下4本ずつ2束状に生じる（工藤, 2017）。

(工藤伸一)

**ズキンタケ目 所属科不明****B**

和名 クロムラサキハナビラタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ionomidotis irregularis* (Schw.) Durand

**【形態的特徴】** 本種は中型な花びら状をした黒褐色のきのこである。共通の短い柄と、それから発達する多数の花びら状の子囊盤からなる。子実層面は黒褐色で、外面は暗茶褐色、粗面で細粒状。子嚢胞子は長楕円形、側糸は糸状で先端細胞が厚壁、ロケット形に膨らむ。

**【選定理由】** ブナの朽ちた切り株や倒木上に発生するが、発生基質および発生環境が限定されており、近年、温暖化等により発生が減少してきているため、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 国内では鳥取県および茨城県のブナ林で発生が確認されており、北方系の種とされている（工藤, 2017）。本県では1997年に初めて十和田市（旧十和田湖町）で採集され（工藤ほか, 1998）、その後、八甲田からも見つかっている（工藤, 2018）。

**【特記事項】** 本種は国内では鳥取県の大山から採取された標本に基づきはじめて報告された（工藤ほか, 1994）。同属のクロハナビラタケ *I. frondosa* (Kobayasi) Korf に類似するが、同種は子嚢胞子が腸詰形、側糸は糸状で先端が鉤状である点で区別がつく（工藤, 2017）。（工藤伸一）

**チャワンタケ目 ベニチャワンタケ科****B**

和名 オオミノミミブサタケ

環境省：該当なし

学名 *Wynnea macrospora* B. Liu et J.Z. Cao

**【形態的特徴】** 子実体は菌核から生じ、共通の柄から多数の縦に長いやや大型の椀状の子囊盤を形成する。子囊盤はウサギの耳状。盤内面は初め暗赤紫色～褐色、のち帯紫黒色。外面は顆粒状で初め暗赤褐色のち黒褐色。菌核は塊茎状、数個の塊に分かれ、表面にはいちじるしい凹凸がある。

**【選定理由】** 本県における生息地は観光地であり、近年の観光客の急激な増加に伴い、周辺は踏み荒らされて環境が悪化してきており、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 国内では広く分布するが発生は比較的まれである。本県では初夏～初秋、ダケカンバやミズナラの樹下に発生することが知られている（工藤, 2017）。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 遊歩道の整備により、環境の悪化を防ぐ対策が必要である。

**【特記事項】** 従来、オオミノミミブサタケには北米に産する *W. americana* Thaxter の学名があてられてきたが、同種は胞子がより短などの点で日本の菌とは異なり、中国から1987年に新種として報告された *W. macrospora* であるとされている（工藤, 2017）。（工藤伸一）

**チャワンタケ目 セイヨウショウロ科****B**

和名 イボセイヨウショウロ

環境省：該当なし

学名 *Tuber indicum* Cooke et Masee

**【形態的特徴】** 本種は地中生で、子嚢果とよばれる小～中型をした類球形のきのこをつくる。子嚢果の表面は黒褐色で、ピラミッド型をした低い疣状の突起におおわれる。肉はかたくしまり、断面は初め類白色、のち黒色となり、大理石模様をあらわす。特有のにおいがある。

**【選定理由】** 本種は、本県ではクリ林から発生が確認されている。発生時期はクリ拾いの時期と一致することから、クリ拾いの一部の人たちにその存在が知られ一般に採取されるようになった。そのため、今後乱獲が進むことにより将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本種は秋に、ナラ林内に発生する（工藤, 2017）といわれている。本県では2016年に八戸市郊外のクリ林から採取されているが、現在確認されている発生場所は1か所だけである。秋～初冬に発生するが、春にも越冬したと思われる子実体が見られる（工藤, 2018）。

**【特記事項】** 本種は欧州で三大珍味として珍重されているトリュフの一種で、いわゆる黒トリュフといわれているきのこの仲間のため、近年採取する人たちが増えている。（工藤伸一）

**ポタンタケ目 ポタンタケ科****B**

和名 イマイオオポタンタケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Hypocrea cerebriiformis* Berk.

**【形態的特徴】** 子実体は小型の平たいクッション状の子座を形成し、裏面は一部で基物に付着する。子座は表面はほぼ平滑、淡褐色～橙色、成熟したものでは放出された胞子で白い粉状となる。裏面は放射状の皺があり褐色、ほぼ中央で円錐状に突き出して柄状になり、暗褐色。内部は赤褐色をおび、かたくしまった肉質。子嚢胞子は微細な突起で覆われ、初め8個の胞子をつくるが、成熟すると隔壁部で2つに別れ16胞子となる。

**【選定理由】** 近年発生していたブナの倒木は朽ちてその後は見つかっていない。生育環境が限定されており、近年の温暖化も一因と考えられ、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 国内では本県を含む北日本で知られているが、発生は比較的まれである。本県では秋に、十和田市（旧十和田湖町）のブナ倒木上から見つかっている（工藤, 2018）。

**【特記事項】** オオポタンタケの和名は異なった2種に対して付けられていることから、本種にたいしては新たにイマイオオポタンタケが提唱されている（長澤, 2015）。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ヌメリガサ科****B**

和名 ナナイロヌメリタケ

環境省：該当なし

学名 *Gliophorus laetus* (Pers.) Herink

**【形態的特徴】** 本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこ。傘は初めまんじゅう形、のち開いて平たい丸山形、中央はくぼむ。表面は初め肌色またはピンク色にオリーブ色、黄色、灰紫色などを交える。湿時放射状の条線があり、著しい粘液に覆われる。ひだは垂生し、疎、ピンク色～肌色で、しばしば淡紫色～淡青色を交える。縁は粘性をおびる。柄は細長く、上下同幅、中空。表面は粘液に覆われ、上部はピンク色、淡紫色または淡青色。下部は帯黄色。

**【選定理由】** 本種は乾燥に弱く、近年の温暖・乾燥化によって発生が減少している。さらにスギ林の老朽化により環境が悪化してきており、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 全国的に分布するが、発生はまれ。本県では秋に草地に発生し、2004年に十和田市（旧十和田湖町）から初めて採集された（工藤, 2004）が、ほかからの報告はない。

**【特記事項】** 県内からは、2004年に本種に類似して全体が黄色のものが採集されているが、これはしばしば本種の変種として取り扱われている（工藤, 2017）。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ホウライタケ科****B**

和名 ミヤマシメジ

環境省：該当なし

学名 *Hydropus nigrita* (Berk. et Curt.) Sing.

**【形態的特徴】** 本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこ。傘は初め円錐形、のち開いて中高の円錐状丸山形、周辺は多少反り返る。表面は繊維状、灰色～帯褐灰色、触れたり老成すると黒く変色する。肉は薄く、淡灰色、のち黒く変色する。ひだはほぼ離生、やや疎、白色、傷つけると黒く変色する。柄は細長く、基部で多少膨らむ。表面は傘より淡色で、傘と同様に変色する。

**【選定理由】** 本種は生育環境が限定しており、乾燥に弱く、近年の温暖・乾燥化によって発生が減少している。さらにスギ林の老朽化により環境が悪化してきており、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 全国に広く分布するが発生は比較的まれ。本県では秋にスギの腐朽材上に発生し、2004年に十和田市（旧十和田湖町）のスギ林から初めて採集された（工藤, 2018）が、近年、発生が減少してきており、他の生息地も確認されていない。

**【特記事項】** 従来本菌に当てられていた学名 *Lyophyllum nigrescens* Hongo は本種の異名。新分類体系では、ニセアシナガタケ属はホウライタケ科に置かれている（工藤, 2017）。（工藤伸一）

**イグチ目 イグチ科****B**

和名 ヤマドリタケ

環境省：情報不足

学名 *Boletus edulis* Bull.

**【形態的特徴】** 本種は中～極めて大型のイグチ型をしたきのこである。傘は栗褐色で無毛平滑、幼時から湿っているとき多少粘性がある。肉は厚く、緻密で極めて堅い。柄は太くて堅く、表面は淡色で、白色のやや細かい網目模様があるが、下方ではしばしば不明瞭。

**【選定理由】** 本種は、本県ではエゾマツ林だけから発生が確認されている。本県のエゾマツ林は分布が限定されていることから本種の発生地域も限定されており、発生も比較的まれで近年発生が見られなくなっていることから、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本種は夏～秋に、針葉樹（主にトウヒ属）の樹下に発生するといわれており、国内では本県以外に北海道から発生が知られている（工藤, 2009）。本県では1997年に八甲田のエゾマツ林から初めて採取された（工藤, 2017）が、近年発生が見られなくなってきた。

**【特記事項】** 本種に類似した種としてヤマドリタケモドキ *B. reticulatus* Schaeff.のほか数種が存在し、しばしばそれらと混同されている。  
(工藤伸一)

**イグチ目 イグチ科****B**

和名 ドクヤマドリ

環境省：該当なし

学名 *Boletus venenatus* Nagasawa

**【形態的特徴】** 本種は大～極めて大型のイグチ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で初め多少ビロード状を呈するが、のち湿っているとき多少粘性がある。肉に弱い青変性があり、切断すると肉が青く変わる性質がある。柄は汚黄色で赤褐色点状の染みがある。有毒種である。

**【選定理由】** 本種は、本県ではエゾマツ林だけから発生が確認されている。本県のエゾマツ林は分布が限定されていることから本種の発生地域も限定されており、発生も比較的まれで、近年発生が見られなくなってきたことから、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本種は国内では本州の亜高山地帯及び北海道のエゾマツやトドマツなどの針葉樹の樹下に発生することが知られている（Nagasawa, 1995）。本県では1996年に八甲田で初めて採集された（工藤, 2017）が、近年発生が見られなくなってきた。

**【特記事項】** 本種の形態的特徴の一つとして肉の青変性が挙げられているが、本県産の子実体では肉の青変性は極めて弱い。  
(工藤伸一)

**タバコウロコタケ目 タバコウロコタケ科****B**

和名 カバノアナタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Inonotus obliquus* (Ach.ex Pers.) Pilát

**【形態的特徴】** 本種は背着生の大型な多孔菌型をしたきのこである。黄褐色の子実体と黒い菌核からなるが、黒色の菌核が巨塊となって樹幹の樹皮を覆うため、見える部分は菌核部分である。子実体の表面は黄褐色～褐色、堅いコルク質、充実して重い。全面に管孔を密布し、暗褐色。

**【選定理由】** 本種は全国的に分布し、カンバ類の樹木に普通に発生が見られるが、生育環境が基質により限定されている上に、菌核が乱獲されているため減少してきている。本県でも同様に菌核が乱獲されており、将来県内での絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本種は主に高山地帯に分布するカンバ類の樹木に普通に発生し、全国的に見られる。本県ではダケカンバの立ち枯木や倒木上に発生するが、一般に採取されてしまうことから、なかなかその存在を把握できなかったものの、近年になってようやく確認された。

**【特記事項】** 堅くて食用に適さないが、菌核が漢方薬として利用されることから、菌核が採取対象とされているため、見つけるのは容易でない（工藤, 2017）。  
(工藤伸一)

**ビョウタケ目 キンカクキン科****C**

和名 ツバキキンカクチャワンタケ

環境省：該当なし

学名 *Ciborinia camelliae* Kohn

本種は菌核から発生する小型な浅い碗形～皿形をしたきのこである。全体に淡褐色～褐色を帯び、短いあるいは長い柄をもつ。ツバキの病害菌の一つで、ツバキの花びらに本菌の胞子が付着して感染し、のちに落下した花の花弁は菌核化して土に埋まり、それから翌年の春に子囊盤が生じることから、発生地域はツバキ林内に限定されている。県内のツバキの自生は夏泊半島が北限であり、そのヤブツバキに発生するものが北限とされている（工藤, 2009）が、近年、発生が減少してきている。今後、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、早春、ヤブツバキの樹下に発生し、平内町と青森市の郊外で発生が知られている（工藤, 2018）。

(工藤伸一)

**チャワンタケ目 アミガサタケ科****C**

和名 トガリフカアミガサタケ

環境省：情報不足

学名 *Morchella patula* Pers. var. *semilibera* (DC.) S. Imai.

本種は中～やや大型な有柄傘状のきのこである。傘はほぼ卵形で頂端は尖り、下縁部は頭部の中央付近まで柄から離れる（帽子状型）。表面はオリーブ褐色をしており、網目状の隆起で覆われる。本種は全国的に発生がまれで本県でも採集例は青森市内から採集された1件だけであり、発生環境も限定されているため、開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は国内のほかに北アメリカ・ヨーロッパ・オーストラリアに分布し、国内では北海道と本州に分布するといわれている（今関・本郷, 1989）が、採集記録は少ない。本県では、1990年に青森市内から初めて採集された（工藤, 2017）が、その後の採集例はない。

(工藤伸一)

**チャワンタケ目 アミガサタケ科****C**

和名 オオズキンカブリ

環境省：情報不足

学名 *Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.

本種は中～大型な有柄で深編笠形の傘をもつきのこである。傘は釣鐘形で柄に深くかぶさり、表面に著しい縦じわがあり、褐色。柄は長円筒形で白色である。従来北海道からしか報告がなかったが、近年、本県からも採集されている。発生場所が限られており、発生もまれであるため、温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では早春、ヤマザクラ等の雑木林内の地面に発生し（工藤, 2018）、1990年に青森市の山林から初めて採集されている（工藤ら, 1998）。その後、蟹田町からも採集されているものの、ほかからの報告はない（工藤, 2018）。本種は子嚢胞子が通常2個しか形成されない特異な性質を持つ。

(工藤伸一)

**チャワンタケ目 チャワンタケ科****C**

和名 スナヤマチャワンタケ

環境省：該当なし

学名 *Peziza ammophila* Durieu et Montagne

子実体は大部分が砂に埋もれ、小～やや中型の有柄碗状の子囊盤を形成する。子囊盤は初め倒洋ナシ形、のち頂部が開口し、深い碗形、縁部は不規則で、しばしば切れこむ。碗の内側は淡褐橙色。外側はより淡色。柄は柱状。海岸の砂浜に埋もれて発生し、全国的に分布するが発生はまれである。近年の護岸工事の増加に伴い良好な砂浜が減少してきており、開発による環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は国内では1981年に新潟県内の砂丘から初めて採集されているが、発生は比較的まれである。本県では秋～初冬、砂浜の波打ち際にほぼ砂に埋もれた状態で発生し、2007年に初めて三沢市海岸の砂浜から採集されている（工藤, 2017）。

(工藤伸一)



**チャワンタケ目 ペニチャワンタケ科****C**

和名 シロキツネノサカズキ

環境省：該当なし

学名 *Microstoma floccosum* (Schw.) Raitviir

本種は小型のワイングラス形をしたきのこである。初め球形、のち頂部が開き、ついにはワイングラス形となる。内面は深紅色であるが、外面と柄は白い毛を密生する。発生地が限定されていることから、近年の温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は全国的に分布するが、従来、類似のシロキツネノサカズキモドキ *Microstoma macrosporum* (Otani) Y. Hrada et S. Kudo と混同されてきており、正確な分布は不明である。本県では初夏、湿り気のある林内の落ち葉に半ば埋もれた落枝上に発生する（工藤, 2017）が、本県における採集記録は十和田市（旧十和田湖町）の山林における2例だけであり、その後の採集例はない（工藤, 2018）。

(工藤伸一)

**チャワンタケ目 ペニチャワンタケ科****C**

和名 ミミブサタケ

環境省：該当なし

学名 *Wynnea gigantea* Berk. et M.A. Curtis

子実体は菌核から生じ、共通の柄から多数の縦に長いウサギの耳状の子囊盤を形成する。子囊盤の内側の子実層面は初め淡褐色～レンガ色のち暗赤褐色。外面は初め内側と同色、のち赤褐色、縦じわがある。柄の基部は土に埋まったショウガの根のような黒褐色の菌核につながる。里山二次林の雑木林に多く見られ全国的に分布するが、発生は比較的まれである。近年の温暖化や里山二次林の放置、開発による雑木林の伐採など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では春～秋、ミズナラなどの雑木林内の地面に発生するが、近年採集報告がない。ナラタケ類と密接な関係があるといわれている（工藤, 2017）。

(工藤伸一)

**チャワンタケ目 クロチャワンタケ科****C**

和名 キツネノサカズキ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Galiella japonica* (Yasuda) Otani

本種は小～やや中型の黒色椀状のきのこである。短い柄をもち、初め黒色の洋梨形の状態から開いて椀形になり褐色の子実層面をあらわす。盤の縁はやや深く星形に裂ける。本種は発生がまれであり、発生環境も限定されているため開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は日本固有種で、岩手県から1918年に発見された標本に基づき新種記載された。その後、60年ぶりに鳥取県・新潟県から相次いで発見され（大谷, 1982）、石川県からも発生が確認されている。本県では初夏、アカマツ林内の地面に発生し、1991年に青森市内の郊外から初めて採集されたが、その後、東通村からも採集されている（工藤, 2018）。

(工藤伸一)

**ポタンタケ目 ポタンタケ科****C**

和名 カエンタケ

環境省：該当なし

学名 *Podostroma cornu-damae* (Pat.) Boedijn

本種は中～大型の棒状～角状あるいは鶏のとさか状をした子座を形成するきのこである。全体赤橙色で、肉質は堅い。極めて強い毒性をもつ。全国的に分布するが、発生は比較的まれである。発生環境が林相によって限定されているが、発生場所が限られ、発生も比較的まれである。近年のナラ枯病などにより環境が悪化してきており、環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、夏～初秋、ブナ・ミズナラなどの広葉樹林内の地面に発生し（工藤, 2017）、1992年に旧上北町で初めて採集されているが、その後同地区での採集報告はない。岩木山麓でも見つかっているとされているが、詳細は不明である（工藤ら, 1998）。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 ハラタケ科****C****和名** シワカラカサモドキ**環境省**：該当なし**学名** *Cystoderma neoamianthinum* Hongo

本種はやや中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は黄色で黄土色の粒状細鱗片を密生し、柄に幅が狭く脱落しやすいつばをつける。分布上学的に貴重な種であるが、発生環境が限定され、発生はまれである。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ブナの倒木上に発生する（工藤, 2017）。本種は国内で新種報告された種で（今関・本郷, 1987）、少なくとも全国のブナ林に広く分布すると思われるが、ほかの類似種と間違っで紹介されている例が見られ、正確な分布情報は不明である。本県では、これまで十和田市（旧十和田湖町）からの採集記録があるが、近年、採集例は減少している（工藤, 2018）。

**（工藤伸一）****ハラタケ目 テングタケ科****C****和名** コササクレシロオニタケ**環境省**：情報不足**学名** *Amanita squarrosa* Nagasawa et Hongo

本種は小～中型のウラベニガサ型をしたきのこ。全体白色で、傘の表面には柔らかい綿質で破片状～いぼ状の脱落しやすい鱗片を多数付ける。日本固有種で、国内では本県・滋賀県・鳥取県で発生が知られている（環境省, 2010）が発生はまれである。近年、雑木林の伐採や下草の放置などによって発生環境が悪化しており、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、青森市郊外のミズナラ雑木林内での発生が確認されている（工藤, 2017）。ササクレシロオニタケ *A. ejii* Zhu L. Yaug に類似するが、同種はより大型で、傘の中央が褐色を帯びる点で異なる。

**（工藤伸一）****ハラタケ目 フウリタケ科****C****和名** ニカワウロコタケ**環境省**：該当なし**学名** *Gloeostereum incarnatum* S. Ito et S. Imai

本種は中～やや大型の多孔菌型をした膠質のきのこである。傘は半円形で短毛に覆われ淡鮭肉色。傘裏は細かいしわ状。生のときは軟らかく、乾けば収縮して軟骨状に堅くなる。本種は従来北海道だけに知られていたきのこであるが、その後、国内の亜高山地帯にも発生することが分かった（今関・本郷, 1989）。発生基質や発生環境が限定されており、本県では採集例は減少してきている。発生も比較的まれであることから、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、ハルニレやイタヤカエデの枯れ木上に発生し（工藤, 2017）、十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林から採集されている。

**（工藤伸一）****ハラタケ目 ヌメリガサ科****C****和名** ウスムラサキガサ**環境省**：該当なし**学名** *Hygrocybe canescens* (A.H. Smith et Hesler) P.D. Orton.

本種は小～やや中型のカヤタケ型をしたきのこである。全体帯紫淡灰色で、傘の表面はフェルト状。湿り気のあるスギ林など発生環境が限定されているが、国内では採集例が少なく、分布上学的に貴重な種である。近年、スギの枝払い後の枝の放置のため枝が堆積するなど環境が悪化して発生が減少してきており、生息地の環境の変化によっては更なる減少が危惧されることから、県内での絶滅が心配される。本種はアメリカ及びヨーロッパ（イギリス・スウェーデン）に分布するが、ヨーロッパでは極めて発生がまれな種とされている。国内では、現在本県からのみ発生が知られており、県内では青森市郊外のスギ林内の草地に発生する（工藤, 2017）。

**（工藤伸一）**

**ハラタケ目 ヌメリガサ科****C****和名** ダイダイヌメリガサ**環境省**：該当なし**学名** *Hygrophorus aureus* (Arrh.) Fr.

本種は小～中型のキシメジ型～カヤタケ型をしたきのこである。傘は粘液に覆われシモフリヌメリガサ*H. hypothejus* (Fr.) Fr.に類似するが、傘は橙色であることで異なる。比較的若いアカマツ林に発生するなど、発生環境が限定されており、マツ枯れ病による環境の変化によって減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種はヨーロッパなどで発生が知られているが、現在、国内からは本県以外正式な報告はない。この原因としては、類似種と混同されている可能性も否定できない。本県では晩秋～初冬、アカマツ林内の地面に発生し、八戸市および青森市郊外に発生することが知られている（工藤, 2018）が、近年、発生が見られなくなっている。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ヌメリガサ科****C****和名** アケボノタケ**環境省**：該当なし**学名** *Hygrocybe calyptriformis* (Berk.et Br.) Fayod.

本種は中型のクヌギタケ型で、淡いバラ色～ライラック色をしている綺麗なきのこである。傘は広円錐形、表面にはほとんど粘性がない。全国的に広く分布するが、発生は比較的まれである。本県では発生地が限定されており、発生は比較的まれで、乾燥に弱いいため、近年の温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、林内のコケ類が繁殖しているような草地に発生する（工藤, 2017）。1995年に十和田市（旧十和田湖町）から初めて確認され、その後、青森市郊外（工藤, 2018）や2018年の現況調査で八戸市郊外の芝生から見ついているものの採集例が少なく、青森市郊外の生息地では年々発生が減少してきている。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ヌメリガサ科****C****和名** トガリワカクサタケ**環境省**：該当なし**学名** *Hygrocybe olivaceoviridis* (Hongo) Hongo f. *olivaceoviridis*

本種は中型のクヌギタケ型で、傘が円錐形、しばしば中央に乳頭状突起がある。表面はオリーブ緑色で粘性なく、繊維状。ひだは柄に短く垂生し、橙黄色。柄には粘性はない。乾燥に弱いため、近年の温暖化による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県以外では滋賀県、香川県で知られている（今関・本郷, 1987）が、発生はまれである。本県では初秋、ブナ・ミズナラ林内に発生し、2016年に十和田市（旧十和田湖町）で初めて見ついているが、その後の採集例はない（工藤, 2018）。ワカクサタケ*H. psittacina* (Schaeff.) Wunscheは傘の色で類似するが、同種は傘・柄とも著しい粘性があることで区別ができる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 シメジ科****C****和名** シロタモギタケ**環境省**：情報不足**学名** *Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead

本種は中～大型のキシメジ型～ヒラタケ型をしたきのこ。傘は淡黄褐色で表面は内生繊維状である。本種は主に溪畔林に発生するなど、発生環境が限定されているが、温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ハルニレやサワグルミなどの枯れ木または立ち木に発生し（工藤, 2017）、発生が確認されているのは現在青森市および五所川原市、十和田市（旧十和田湖町）の3か所である（工藤, 2018）。国内では本県以外に北海道と鳥取県から報告があるが、発生はまれである。従来ブナシメジ*H. marmoreus* (Peck) Bigelowと混同されてきた（長沢・有田, 1988）が、同種では傘に大理石模様があることで区別できる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 シメジ科****C**

和名 ホンシメジ

環境省：該当なし

学名 *Lyophyllum shimeji* (Kawamura) Hongo

本種は中～大型で厚肉なキシメジ型をしたきのこである。傘は淡灰褐色または暗灰褐色、柄は太く白色で、しばしば株状に生える。全国的に広く分布し、古くから味シメジといわれ重宝されてきたが、生育環境が限定されているため発生は比較的まれである。本県では夏～秋、ミズナラ林またはアカマツ・ミズナラなどの混交林内に発生する（工藤, 2017）が、近年、発生が減少してきている。温暖化やミズナラ雑木林の伐採などにより良好な里山二次林が減少してきており、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。傘の色により黒と白の2タイプがありどちらも同一種とされてきたが、近年の研究では2系統があることが報告されている（工藤, 2017）。

**(工藤伸一)****ハラタケ目 シメジ科****C**

和名 ヒメムラサキシメジ

環境省：該当なし

学名 *Rugosomyces ionides* (Bull.) Bon

本種は小型のキシメジ型をしたきのこである。傘および柄は紫色、ひだは密で白色、柄は繊維状でささくれる。本種は全国的に分布するが発生は比較的まれである。発生環境が限定されており、近年の温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、初秋、針葉樹林樹下の地面に発生する。1998年に八戸市郊外の針葉樹の樹下から初めて採集され、その後青森市郊外からも見つかったが、発生はまれであり（工藤, 2018）、最初に発見された八戸市郊外ではその後の発生は見られない。コムラサキシメジ *Lepista sordida* (Schumach.) Singer に類似するが、同種はひだも紫色をしていることで区別ができる（工藤, 2017）。

**(工藤伸一)****ハラタケ目 ホウライタケ科****C**

和名 オドタケ

環境省：該当なし

学名 *Clitocybula esculenta* Nagasawa et Redhead.

本種は中～大型のモリノカレバタケ型をしたきのこである。傘は粘土色で古くなると黒っぽくなる。柄は長く、束になって生える。本種は発生環境が溪畔林などに限定されており、発生も比較的まれで、温暖化や開発による環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は1998年、本県産標本に基づき新種報告されたきのこであり（Nagasawa and Redhead, 1988）、国内では本県以外に北海道・長野県・栃木県・群馬県など発生地は広範囲に及ぶものの、発生は比較的まれである。本県では秋、ブナ・ミズナラ・ハルニレ・トチノキなどの腐朽材上に発生し、従来からオドタケの名前で食用に利用されていた（工藤, 2017）。

**(工藤伸一)****ハラタケ目 タマバリタケ科****C**

和名 キノボリツエタケ

環境省：該当なし

学名 *Ponticulomyces kedrovayae* R.H. Petersen

本種は中型のモリノカレバ型～多少キシメジ型。傘は初め丸山形、のちほぼ平らに開く。表面は帯茶褐色、平滑、湿時粘性がある。ひだは上生～多少湾生、淡黄白色。本種は全国的に発生がまれで、発生環境が限定され、分布上学的に貴重な種である。近年の温暖化などの環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ブナの倒木上に発生し（工藤, 2017）、2003年に八甲田田代平で初めて採集されている（工藤, 2018）。その後、十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林からも採集されたが、発生は比較的まれである。本種は孢子の大きさが15～21×10～12μmと大形であることで、他の種類とは区別が付きやすい。

**(工藤伸一)**

**ハラタケ目 タマバリタケ科****C**

和名 ホシアンズタケ

環境省：該当なし

学名 *Rhodotus palmatus* (Bull.) R.Maire

本種は小～中型のキシメジ型をした全体が淡紅色のきのこである。傘の表面は初め網目状のしわをあらわし、柄に褐色の分泌物を付着する。本種は1属1種のきのこで、分布上学的に貴重な種である。北海道だけから知られていたが、近年、本県ほか北日本各地でも見られるようになったものの、全国的には発生はまれ。発見例が少なくなってきており、発生環境が限定されているため温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、春および秋、ハルニレの枯れ木や倒木などの腐朽木上に発生する（工藤, 2017）。1989年に十和田市（旧十和田湖町）から初めて発見され、その後、五所川原市からも採集されている（工藤, 2018）。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 ヒラタケ科****C**

和名 ツバヒラタケ

環境省：情報不足

学名 *Pleurotus dryinus* (Pers.) Kummer

本種は大型で厚肉なヒラタケ型をしたきのこである。傘は淡黄褐灰色で、幼時、柄に薄い膜質のつばをもつ。国内では北海道だけから知られていた種（今関・本郷, 1987）であったが、近年、本県をはじめ各地で見ついているものの発生はまれである。発生基質及び発生環境が限定されているため、温暖化などによる環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、溪畔林のハリギリなどの広葉樹の立ち木に発生し、1992年に旧十和田湖町から初めて採集されているが、その後、各地のりんご畑のリンゴの立木からもしばしば採集されている（工藤, 2018）。ヒラタケ属*Pleurotus*に所属するが、柄につばをもつという他の種とは異質な特徴がある。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 ウラベニガサ科****C**

和名 キヌオオフクロタケ

環境省：情報不足

学名 *Volvariella bombycina* (Schaeff.) Sing.

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘の表面は類白色、絹糸状の毛で密に覆われ、柄の基部には黄褐色の膜質袋状の大きなつぼがある。本種は全国的に分布するが、発生は比較的まれで、分布上学的に貴重な種である。発生環境が限定されており、発生はまれであることから、近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、広葉樹の立ち木や枯木に発生する（工藤, 2017）。下北や十和田市（旧十和田湖町）の溪畔林で発生が知られているが、2005年に確認された十和田市（旧十和田湖町）では、その後の発生の情報は無い（工藤, 2018）。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****C**

和名 ツノシメジ

環境省：該当なし

学名 *Leucopholiota decorosa* (Peck) O.K. Miller, Volk et Bessette

本種は中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は褐色で全体ささくれ、特に中央は角状突起に覆われる。北方系の種で国内では本県のほかに、中部地方の山間部で発生が知られているが、比較的まれである。分布上学的に貴重な種であり、温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ブナの倒木上に発生する（工藤, 2017）。北アメリカなどに分布する種で、*Leucopholiota*（ツノシメジ）属の新組み合わせとして発表された（Miller *et al.*, 1996）。国内では1989年に十和田市（旧十和田湖町）から県内で初めて採集されている（工藤, 2018）。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****C**

和名 バカマツタケ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Tricholoma bakamatsutake* Hongo

本種は中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は栗褐色でマツタケ *T. matsutake* (S. Ito et S. Imai) Sing. に酷似し、特有の香気をもつ。本種は全国的に広く分布し、環境の良いミズナラなどの里山二次林に見られるが、発生地はある程度限定され、発生も比較的まれである。本県では初秋、里山のミズナラ・カシワの雑木林内に菌輪をつくって発生する（工藤, 2017）が、近年の開発による雑木林の伐採や下草の放置などによって発生環境が悪化しており、また、本種はマツタケに極めて似ているところから、乱獲のため減少している。環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県産標本に基づき新種記載された種である（本郷, 1974）。（工藤伸一）

**イグチ目 イグチ科****C**

和名 アカジコウ

環境省：該当なし

学名 *Boletus speciosus* Frost

本種は大型のイグチ型をしたきのこである。傘はバラ紅色でときに青色の染みを生じ、平滑で湿っているとき多少粘性がある。肉には弱い青変性がある。傘裏は管孔状で淡黄色、傷を付けると青く変色する。柄は淡黄色で細かい網目に覆われる。全国的に広く分布し、里山二次林のミズナラなどの雑木林に多く見られるが、近年の里山二次林の放置や、開発による伐採で環境が悪化しており、今後の温暖化による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、里山のアカマツの交じったミズナラなどの雑木林に発生する（工藤, 2017）が、発生は比較的少なく、近年は発生が減少してきている（工藤, 2018）。（工藤伸一）

**イグチ目 イグチ科****C**

和名 ムラサキヤマドリタケ

環境省：該当なし

学名 *Boletus violaceofuscus* Chiu

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘、柄とも暗紫色を帯び、傘はしばしば黄色、オリーブ色、褐色などの斑紋を生じ、柄は網目模様で覆われる。本種は全国的に広く発生するが、本県を含め北日本では発生は比較的まれである。本県では発生地が限定されており、近年の温暖化や里山二次林のミズナラ雑木林の伐採などの環境の悪化により、近年発生減少の傾向が見られる。環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、アカマツが交じったミズナラ林に発生するが、発生は比較的まれである。なお、八甲田からは本種に類似して傘の色が淡色のウスムラサキヤマドリ *B. separans* Peck が知られている（工藤, 2017）。（工藤伸一）

**イグチ目 イグチ科****C**

和名 アカエノキンチャマイグチ

環境省：該当なし

学名 *Leccinum aurantiacum* (Bull.) S.F. Gray

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘は橙茶褐色で多少綿毛状。傘の縁には垂れ下がった縁膜片がある。柄の表面は汚黄白色の地に、淡茶褐色の粒状～ささくれ状の細鱗片を密生する。発生環境が限定されており、発生はまれで、近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初夏に、ヤマナラシの樹下に発生する（工藤, 2017）が、本県以外での分布は不明。本県での採集記録は1989年に青森市郊外から採集された1例だけであり、その後の採集報告はない（工藤, 2018）。キンチャマイグチ *L. versipelle* (Fr.) Snell に類似するが、同種は傘がほぼ平滑で柄の鱗片は黒褐色である点で異なる。（工藤伸一）

**イグチ目 オウギタケ科****C**

和名 フサクギタケ

環境省：該当なし

学名 *Chroogomphus tomentosus* (Murr.) O.K. Miller

本種は小～中型のカヤタケ型をしたきのこである。クギタケ*Chroogomphus rutilus* (Schaeff.) O.K. Millerに類似するが、全体鈍い橙色または黄土色で傘の表面は軟毛で覆われる。本種はマツ属・モミ属・ツガ属などの針葉樹林に発生し（今関・本郷, 1987）、全国的に分布するものの、発生はまれである。分布上学的に貴重な種であるが、発生がまれなため採集例が少なく、発生環境が限定されており、温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、アオモリトドマツ林内に発生し（工藤, 2017）、八甲田からの採集例が1例あるだけで、その後の採集報告はない（工藤, 2018）。

**(工藤伸一)****ハラタケ目 クリロイグチ科****C**

和名 アイゾメイグチ

環境省：該当なし

学名 *Gyroporus cyanescens* (Bull.) Quéf.

本種は小～中型のイグチ型をしたきのこである。傷を受けると直ちに濃紺色に変色する。傘は淡黄色でフェルト状。本種は西日本で知られていたきのこであるが、近年、本県のほかにも報告されており、全国的に分布することが分かった。発生は比較的まれであり、分布上学的に貴重な種であるが、近年、本県からの報告はない。温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、マツの交じった林内の地面に発生し（工藤, 2017）、1995年に青森市の郊外から初めて採集されているが、現在、発生が確認されている場所はこの1か所だけであり、ほかからの採集報告はない（工藤, 2018）。

**(工藤伸一)****イグチ目 ヌメリイグチ科****C**

和名 キヌメリイグチ

環境省：該当なし

学名 *Suillus americanus* (Peck) Snell

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘は円錐状まんじゅう形からほぼ平らに開く。表面は黄色～淡灰褐色、粘性があり、圧着した帯褐色の鱗片を散在する。傘の下面は淡黄色の膜で覆われるが、のち破れて縁に垂れ下がる。本種は5針葉マツと菌根関係にあり、発生環境が限定されている。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、キタゴヨウマツの樹下に発生し、北海道だけから知られていたが、2009年に青森市郊外でも見つかった（工藤, 2017）。青森市の発生地では樹木の伐採により消滅した（工藤, 2017）が、2018年の現況調査により、八戸市の郊外でも発生が確認されている。

**(工藤伸一)****イグチ目 ヌメリイグチ科****C**

和名 ヒメヌメリイグチ

環境省：該当なし

学名 *Suillus viscidipes* Hongo

本種は小型のイグチ型をしたきのこである。傘の表面は凹凸状、肉桂色で粘性があり、柄は細長く、早落性のつばをつける。管孔や肉等には変色性はない。本種は日本固有種とされ、里山二次林に多く見られ、分布上学的に貴重な種である。里山二次林であるミズナラ雑木林の伐採や放置により減少してきており、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。国内では北海道から本州まで広く分布している（工藤, 2009）が、発生が比較的まれなため採集例も少ない。本県では夏～初秋、アカマツが交じったミズナラ雑木林内の地面に発生し、青森市の郊外で採集されている（工藤ら, 1998）。

**(工藤伸一)**

**ラッパタケ目 ラッパタケ科****C****和名** ホウキタケ**環境省**：該当なし**学名** *Ramaria botrytis* (Pers.) Ricken

本種は中～大型のサンゴ型をしたきのこである。全体ワイン色で、太い白色の柄から上方に枝を分け、先端は淡紅紫色のハナヤサイ状となる。全国的に広く分布し、里山二次林の雑木林で多く見られるが、ミズナラ雑木林の伐採や放置による環境の悪化で発生減少の傾向が見られ、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、里山二次林のミズナラなどの雑木林に発生する（工藤, 2017）が、近年、発生が減少してきている。なお、近年の分類学的研究では国内で本種といわれている菌には複数の種が混同されている可能性があると言われており（工藤, 2017）、県内産も検討の必要がある。（工藤伸一）

**タバコウロコタケ目 タバコウロコタケ科****C****和名** ニクウスキノブタケ**環境省**：該当なし**学名** *Phellinus acontextus* Ryv.

本種は小～中型の多孔菌型をした多年生のきのこである。子実体は無柄。傘は半円形。表面は茶褐色、多数の環紋をあらわす。肉は極めて薄く木質。子実層托は管孔状で長く、傘の断面のほとんどを占める。ブナの立ち木の損傷部分に多数重なって発生するが、発生基質および発生環境が限定され、全国的にも発生はまれである。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は十和田市（旧十和田湖町）から採集された標本に基づき日本新産種として報告されている（工藤, 2017）が、本県で発生が知られているのはこの1例だけで、ほかからは見つかっていない（工藤, 2018）。（工藤伸一）

**スッポンタケ目 スッポンタケ科****C****和名** アカダマキノガサタケ**環境省**：該当なし**学名** *Phallus rubrovolvatus* (M. Zang, D.G. Jia et X.X. Lin) Kroisel

本菌は幼時赤褐色の卵形で、成熟すると裂開して中から円柱状の先端に釣鐘形の頭部つけた白い柄をのばす大型のきのこである。頭部の表面は網目状で、暗緑色グレバをつけ、裏面から大きな網目のレース状の白いマントを柄の2/3程度まで垂らす。全国的に分布するが、発生環境が限定されており、発生は比較的まれである。本県では八戸市の郊外から初めて採集されたが、その後発生地は宅地化され消滅した。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。初夏、笹の茂った林道脇に発生し（工藤, 2017）、八戸市で知られていた以外、ほかからの採集報告はない（工藤, 2018）。（工藤伸一）

**タマチョレイタケ目 ツガサルノコシカケ科****C****和名** カンバタケ**環境省**：該当なし**学名** *Piptoporus betulinus* (Bull.) Karst.

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は腎臓形でくぼんだ位置に太くて短い柄をつけるが、ときに半円形で柄は痕跡的である。表面は淡褐色でなめし革のような感触があり、傘裏は微細な管孔状である。本種は全国的に分布し、亜高山のカバノキ林で発生が見られる（今関・本郷, 1989）が、本県では2004年に八甲田のダケカンバ林から初めて採集された（工藤, 2018）。発生基質および発生環境が限定されており、発生も比較的まれであることから、環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では夏～秋、ダケカンバの枯れ木または生木上に発生する（工藤, 2017）が、2018年の現況調査ではヤマザクラにも発生することが分かった。（工藤伸一）



**タマチヨレイタケ目 タマチヨレイタケ科****C****和名** ツガノマンネンタケ**環境省**：該当なし**学名** *Ganoderma tsugae* Murrill

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は扇形～じん臓形で、表面は初め黄色、しだいに赤褐色からほとんど黒くなり、ニス状の光沢があり、環紋をあらわす。本種は山岳地帯や北方に多く分布し、モミ・ツガなどの針葉樹の枯木や倒木上に発生する。発生環境が限定され、比較的発生がまれであり、分布上学的に貴重な種である。近年の温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では夏～秋、アオモリトドマツの立ち木や倒木などに発生する（工藤, 2017）が、採集例は少ない。マンネンタケ *G. lucidum* (Leyss.) P. Karst. に類似するが、同種は広葉樹の根際に発生し長く発達した柄をつくることで区別ができる。（工藤伸一）

**タマチヨレイタケ目 タマチヨレイタケ科****C****和名** ニオイカワキタケ**環境省**：該当なし**学名** *Lentinus suavissimus* Fr.

本種は小型のカヤタケ型をしたきのこである。子実体はサンショウに似た特有の香りをもつ。傘の表面は卵黄色で無毛平滑である。国内では本県のほかに、静岡県・鳥取県で発生が確認されている（今関・本郷, 1987）が、発生は極めてまれである。本県では初秋、ミズナラの枯木に発生する（工藤, 2017）。発生環境が限定されており、採集報告は極めて少ないことから、近年の温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県ではこれまで青森市郊外の山林で発生が確認されているが、現在、他の地域からの採集例がない（工藤, 2018）。従来、ヒラタケ科カワキタケ属 *Panus* に置かれていたが、近年、ケガワタケ属 *Lentinus* に置かれている。（工藤伸一）

**ベニタケ目 ニンギョウタケモドキ科****C****和名** ニンギョウタケ**環境省**：情報不足**学名** *Albatrellus confluens* (Alb. et Schw.) Kotl. et Pouz.

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。有柄で共通の根もとから肉質でクリーム色扇形の傘を多数生じ、傘裏は管孔状である。本種は全国的に分布し、アカマツやキタゴヨウマツまたはしばしばモミヤトウヒなどの針葉樹に発生する（今関・本郷, 1989）。本県ではアカマツ林から採取されているが、発生はまれであり、近年の松枯れ病の拡大など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、アカマツ林内の地面に発生し、2005年に大鰐町の山林から採集されるまでは長らく見つかっていなかったものである。その後の採集報告はなく、現在知られているのはそのときの1例だけである（工藤, 2018）。（工藤伸一）

**シロキクラゲ目 シロキクラゲ科****C****和名** シロキクラゲ**環境省**：該当なし**学名** *Tremella fuciformis* Berk.

本種は中～やや大型で、重なり合った花弁状のきのこである。子実体は樹皮の裂け目から発生し、不規則なとさか状裂片の集まりとなる。肉はやや硬いゼラチン質で全体白色。全国的に分布するが本種は温帯、熱帯地方に広く分布するきのこで北方では発生が珍しい。分布上学的に貴重な種であり、近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初夏、広葉樹（おもにミズナラ）の枯れ木や倒木の樹皮の裂け目から発生する。本県では、2002年に八甲田で初めて採集された（工藤, 2018）が、その後の発生は見られない。県内には本種と類似した未記録の種が存在し（工藤, 2017）、同種と混同されている可能性がある。（工藤伸一）

## イボタケ目 マツバハリタケ科 D

和名 クロカワ  
学名 *Boletopsis grisea* (Peck) Bondartsev et Singer

環境省：情報不足

本種は中～大型のイグチ型のきのこ。傘はまんじゅう形から平らに開く。表面は灰白色、中央で細かくひび割れてささくれ、暗灰褐色。縁はしばしば放射状に裂ける。肉は多少強靱。

本県では秋、アカマツ林に発生する。松枯れ病などの蔓延により環境省の情報不足に指定されており、県内においても今後調査が必要である。本菌には従来*B. leucomelaena* Pers.の学名が当てられていたが、同種はトウヒ林に発生する種であり本種とは異なる（工藤, 2017）。

（工藤伸一）

## チャワンタケ目 アミガサタケ科 D

和名 テンガイカブリ  
学名 *Verpa digitaliformis* Pers.

環境省：該当なし

本種は中型で有柄、頭部が傘状のきのこである。傘は釣鐘形で柄にかぶさるように発達する。傘の表面はほぼ平滑で、黄土褐色～褐色。柄は円筒形で中空。表面は淡黄白色でうろこ様のしわがある。詳細な生態、分布等の情報については不明である。

本県では春、草原や雑木林内の地面に発生する（工藤, 2017）が、発生がまれであるため採集例が少なく、情報不足である。今後、生態や分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ポタンタケ目 ノムシタケ科 D

和名 トワダミドリクチキムシタケ  
学名 *Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi et Shimizu) Kepler, G.H. Sung et Spatafora

環境省：情報不足

本種は腐朽木中の甲虫の幼虫に発生するきのこであり、環境省の情報不足に指定されている（環境省, 2015）。

県内の十和田から採集され新種記載された種であるが、本県における生態や分布は不明であることから、今後生息情報の収集が必要である。

（工藤伸一）

## チャワンタケ目 アミガサタケ科 D

和名 イモタケ  
学名 *Imaia gigantea* (Imai) Trappe et Kovács

環境省：該当なし

本種は中～やや大型なジャガイモ様のきのこ。表面は淡黄～帯褐橙色、凹凸で大小の低い疣があり粗面である。肉は堅い。本州以北に分布する（今関・本郷, 1989）。

本県では秋、広葉樹雑木林内の林道脇など土が露出したところの地中に発生する（工藤, 2017）。近年青森市内から発生が確認された（工藤, 2018）ものの、地下生のきのこは採集例が少ないため調査が不十分であり、今後の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ポタンタケ目 オフィオコルジケプス科 D

和名 クビナガクチキムシタケ  
学名 *Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H. Sung, J.M. Sung et Spatafora

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本菌は湿った朽木中のクチキカ類の幼虫から生じ、朽木の表面上に径2.5～4.5mm、白色、綿質の円盤状のスービクルを形成し、その上に子囊殻を半裸生する。

国内では山形県で初めて見つかった種で、その後青森県十和田市（旧十和田湖町）からも見ついているが、現在本県以外の発生地は不明（環境省, 2015）。

本種は環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているが、県内においては生態等の情報が不足しているため今後調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 ハラタケ科 D

和名 トゲホコリタケ  
学名 *Bovista yasudae* Lloyd

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本種は小型な団子形のきのこである。子実体は球形あるいは偏球形、外皮は淡褐色で暗褐色の刺を持つが、老時脱落して円痕となる。生態は不明であるが、日本特産種とされ、本県・北海道・宮城県に分布する（環境省, 2015）。

国の絶滅危惧種（VU）に選定されており、生息地に本県もあげられているが、本県ではほかに確実な発生記録がないため発生地等の情報が不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ハラタケ目 テングタケ科****D****和名** カブラテングタケ**学名** *Amanita gymnopus* Corner et Bas**環境省：該当なし**

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこ。傘はほぼ平らに開く。表面はクリーム色、黄土色膜質のいぼを付着する。ひだは黄色。柄は膜質、早落性のつばをつけ、基部は球根状に膨らむがつばを欠く。主にブナ科の樹下に発生し、国内各地に分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では2013年に下北から本県で初めて採集された（工藤, 2017）。分布等学術的に貴重なきのこであるが、詳細な採集記録はないことから生息情報の収集が必要である。（工藤伸一）

**ハラタケ目 テングタケ科****D****和名** オニテングタケ**学名** *Amanita perpasta* Corner et Bas**環境省：該当なし**

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で、表面に円錐形褐色のいぼを散布する。コジイ、アラカシなどの樹下に発生するが、まれとされている。国内では京都府・熊本県から知られている（今関・本郷, 1987）が詳細な分布等は不明である。

本県における記録は県立郷土館で行われたきのこ展示会に持ち込まれた1標本のみであり、分布や生態については不明である（工藤, 2018）ことから、今後、詳細な調査が必要である。

**（工藤伸一）****ハラタケ目 モミタケ科****D****和名** オオモミタケ**学名** *Catathelasma imperiale* (Fr.) Sing.**環境省：該当なし**

本種は大型のカヤタケ型をしたきのこ。傘は黄灰褐色のち褐色～オリーブ褐色で、中央付近に不明瞭な鱗片がある。柄は太く長く、根状に伸び、柄の上部には二重のつばをつける。本州ではアオモリトドマツなどの針葉樹の林内に発生するとされる（今関・本郷, 1987）。

本県では過去に採集記録がある（成田, 1990）ものの、詳細が不明でその後の採集報告もない。分布上貴重な種であり、今後、本県における分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ハラタケ目 フウセンタケ科****D****和名** オオツガタケ**学名** *Cortinarius claricolor* (Fr.) Fr.**環境省：該当なし**

本種は大型のキシメジ型をしたきのこである。傘は橙褐色で粘性があり、周辺には白色綿毛状の被膜の名残を付着する。

本県ではアオモリトドマツなどの亜高山帯の針葉樹またはブナの樹下に発生し（工藤, 2017）、2004年に採集されている（工藤, 2018）が、その後の採集報告もなく生態は不明である。本種は従来類似種の通称ツガタケと言われているきのこ混同されてきており（工藤, 2017）、今後、詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ハラタケ目 カンゾウタケ科****D****和名** カンゾウタケ**学名** *Fistulina hepatica* (Schaeff.) with.**環境省：該当なし**

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は舌形で、表面は暗赤褐色、微細な粒状。肉は血紅色で赤白色の筋模様を表し、血液状の赤い汁を含んで柔軟。ブナ科の樹木の地際に発生し、日本全土に広く分布するとされているが、樹種は主にシイである（今関・本郷, 1989）ことから、温帯系のきのこと思われる。

本県では秋、広葉樹の樹幹の根際に発生する（成田, 1990）が、極めてまれで採集例が少なく、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

**（工藤伸一）****ハラタケ目 ヒドナンギウム科****D****和名** クロキツネタケ**学名** *Laccaria nigra* Hongo**環境省：該当なし**

本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこである。傘は灰～帯褐灰色で、中央部はほとんど黒色、湿時周辺に条線をあらわす。柄は細長く、繊維状で傘と同色。日本特産の可能性があるとされ、林内地上に発生し、国内では滋賀県から知られている（今関・本郷, 1987）。

本県では初秋、草地地面に発生し、八戸市の郊外から確認されているが、詳細は不明（工藤, 2018）である。分布上貴重であるが、情報不足であり、今後、詳細な調査が必要である。

**（工藤伸一）**

## ハラタケ目 ヌメリガサ科

D

和名 カワリワカクサタケ

学名 *Hygrocybe olivaceoviridis* f. *hirasanensis*  
(Hongo) Hongo

環境省：該当なし

本種は小型のクヌギタケ型をしたきのこ。傘は円錐状丸山形、しばしば中央に乳頭状突起がある。表面は粘性なく、繊維状、初めオリーブ暗灰褐色、のち全体に淡紅色を帯びる。ひだは橙色。柄は粘性なし。分布等の詳細は不明。

本県では秋、林内の地面に発生し、2010年に青森市郊外で初めて採集された（工藤, 2017）。乾燥に弱く、発生はまれで、近年の温暖化に伴い、発生が見られなくなっていることから、今後、発生情報の収集が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 クヌギタケ科

D

和名 ニセシジミタケ

学名 *Tectella patellaris* (Fr.) Murr.

環境省：該当なし

本種は小型のヒラタケ型をしたきのこである。傘は黄土白色～赤褐色で、柄はなく、幼時、傘の下は膜質類白色のつばに覆われる。発生がまれで、全国的な分布状況は不明である。

本県では秋、ブナの枯れ枝に発生し（工藤, 2017）、1998年に十和田市蔦から初めて見ついている（工藤, 2018）が、発生基質および発生地域が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 タマバリタケ科

D

和名 スギノタマバリタケ

学名 *Physalacria cryptomeriae* Berthier et  
Rogerson

環境省：該当なし

本種は傘をつくらず、球形～類球形の頭部と円柱状の柄からなる待ち針状のきのこ。頭部は通常1mm。表面は白色～淡クリーム白色、極めて微細な毛を密生する。柄は通常長さ1mm。国内に広く分布するが、採集例は少ない。

本県では梅雨時、スギの落枝の枯れた葉上に発生し、1998年に初めて採集された（工藤, 2017）。乾燥に弱く、近年発生が見られなくなっていることから、今後発生情報の収集が必要である。（工藤伸一）

## ハラタケ目 シメジ科

D

和名 ナガエノヤグラタケ

学名 *Asterophora parasitica* (Bull. ex Pers.)  
Singer

環境省：情報不足

本種は小型のキシメジ型のきのこ。傘は丸山形。表面は淡灰褐色～灰白色、絹状光沢があり、放射状に走る繊維で覆われる。ひだは灰褐色。柄は細長い。ひだ部に紡錘状、平滑な厚膜胞子をつくる。ベニタケ科の子実体に発生し、熊本県から知られている（今関・本郷, 1987）。

本種は分布の実態等については不明であることから環境省の情報不足に指定されている。本県では過去に撮影記録がある（工藤, 2018）が、標本がないため今後調査が必要である。

（工藤伸一）

## ハラタケ目 タマバリタケ科

D

和名 ヌメリツバタケ

学名 *Mucidula mucida* (Schrad.) Pat. var.  
*asiatica* R.H. Petersen

環境省：該当なし

本種は小～中型のモリノカレバタケ型のきのこ。傘は半球形～まんじゅう形。表面には著しい粘性があり、淡灰褐色。柄の上部に白色膜質のつばをもつ。ブナなどの枯れ木や倒木上に発生し、広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では大谷(1956)の採集報告以来採集例がないことから生息情報が必要である。近縁のヌメリツバタケモドキ *M. mucida* (Schrad.) Pat. var. *venosolamellata* (Imazeki et Toki) R.H. Petersen はひだが皺状であることで異なる。（工藤伸一）

## ハラタケ目 ヒラタケ科

D

和名 アラゲカワキタケ

学名 *Panus lecomtei* (Fr.) Corner

環境省：該当なし

本種は小～中型のカヤタケ型をしたきのこ。傘はまんじゅう形のち漏斗形となる。表面は初め褐紫色のち黄土褐色、粗い毛を密生する。肉は強靱。ひだは垂生し狭幅。ブナ科の樹木に発生し、広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では春～初夏、ブナの倒木などに発生する（工藤, 2017）が、近年採集例が減少していることから、発生情報の収集が必要である。近縁のカワキタケ *Panus torulosus* (Pers.) Fr. は傘の表面に粗毛がないことで異なる。（工藤伸一）

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 シモコシ

学名 *Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet

環境省：準絶滅危惧

本種は中型のキシメジ型をしたきのこ。傘はまんじゅう形から平らに開く。表面は湿時粘性があり、硫黄色、中央部は赤褐色で小鱗片状。ひだは硫黄色。マツ林ときに広葉樹林に発生し、国内に広く分布（今関・本郷, 1987）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では初夏および秋やや遅く、海岸の砂地や山地のアカマツやクロマツの樹下に発生する（工藤, 2017）が、情報が不足しており、今後調査が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 シロマツタケモドキ

学名 *Tricholoma radicans* Hongo

環境省：準絶滅危惧

本種は小～中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は丸山形。ほぼ白色で表面はひび割れ鱗片状。肉はときに松脂臭がある。柄は白色、繊維状膜質のつばをもち、つばより下はささくれ状の鱗片に覆われる。マツ老齢林やときに広葉樹林などに発生（工藤, 2017）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では秋にマツ林などに発生するが、情報が不足しており、今後詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**イグチ目 イグチ科****D**

和名 アシナガイグチ

学名 *Boletellus elatus* Nagasawa

環境省：該当なし

本種は中型のイグチ型をしたきのこである。傘の表面は赤褐色～栗褐色で多少フェルト状。柄は細長く軟毛で覆われる。アカマツとコナラの混成林やシイ・カシ林に発生し、本州以南に分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では、初秋、アカマツの交じったミズナラなどの雑木林内の地面に発生し（工藤ら, 1998）、1990年に青森市郊外で初めて確認された（工藤, 2018）が、その後の採集例がないため、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 マツタケ

学名 *Tricholoma matsutake* (S. Ito et S. Imai)

Sing.

環境省：準絶滅危惧

本種は中～大型のキシメジ型をしたきのこ。傘は球形から平らに開く。表面は栗褐色の繊維状鱗片に覆われるが、のち放射状に裂ける。肉は緻密で特有の香りがある。マツ林に発生し、国内に広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では秋にアカマツやクロマツ林に広く発生する（工藤, 2017）が、発生地は管理されているところが多いため情報が不足しており、今後調査が必要。

(工藤伸一)

**ハラタケ目 キシメジ科****D**

和名 マツタケモドキ

学名 *Tricholoma robustum* (Alb. et Schwein.)

Ricken

環境省：準絶滅危惧

本種は中型のキシメジ型をしたきのこ。傘は球形でのちほぼ平らに開く。表面は赤褐色で鱗片に覆われる。肉は白色で褐変性があり、においは温和。アカマツ林に発生し、国内に広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では秋遅く、海岸などのアカマツやクロマツ林内地面に発生するが、比較的まれ（工藤, 2017）なため情報が不足しており、今後調査が必要である。

(工藤伸一)

**イグチ目 ヒロハアンズタケ科****D**

和名 コゲチャヒロハアンズタケ

学名 *Hygrophoropsis bicolor* Hongo

環境省：該当なし

本種は中型のカヤタケ型をしたきのこである。傘の表面は橙色をおびた暗褐色で、ビロード状。肉は特有のにおいがある。アカマツの腐朽材上に発生し、日本特産で、国内では滋賀県から知られている（今関・本郷, 1987）。

本県では採集記録（成田, 1990）があるものの、標本の所在及び発生場所等の生態は不明であり、その後の採集報告もない。

本県においては情報不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**イグチ目 ショウロ科****D**

和名 ホンショウロ

学名 *Rhizopogon luteolus* Fr. et Nordh.

環境省：情報不足

本種は小～やや中型の団子形をしたきのこで、半地中～地中生。表面は初め白色のち帯黄色で、地表に出ると黄褐色となり、傷をつけても赤く変色はしない。内部は初めから麦色で不快臭がある。国内における分布は不明。

本県では春および秋、クロマツの樹下に半分地中に埋もれて発生するが、発生地が確認されているのは青森市郊外の1か所だけであり（工藤, 2018）、その後の生息情報が不明であることから、今後、詳細な調査が必要である。

(工藤伸一)

**アンズタケ目 アンズタケ科****D**

和名 アクイロウスタケ

学名 *Cantharellus cinereus* (Pers.) Fr.

環境省：該当なし

本種は小型のラッパタケ型をしたきのこ。傘はやや不整形で中央深くくぼむ。表面は暗褐色のち灰褐色。子実層托は灰白色。厚い明瞭な皺ひだを生じ、互いに連絡する。本州以北に分布し、発生はややまれ（今関・本郷, 1989）。

本県では2015年に十和田市（旧十和田湖町）で初めて採集され（工藤, 2018）、2018年の現況調査で八甲田代平でも採集されているが発生はまれで、十和田市ではその後の発生は見られず、発生情報の収集が必要である。（工藤伸一）

**タマシヨレイタケ目 マイタケ科****D**

和名 シロマイタケ

学名 *Grifola albicans* Imaz.

環境省：該当なし

本種は全体白色で、多数の枝分かれした先に不規則な扇形の傘を生じて大きな株を作る。ミズナラの根際に発生し、日本特産とされている（今関・本郷, 1989）。

本種は下北半島の旧川内町で採取された標本に基づき新種記載された種（今関, 1943）。本州以北に分布し、本県では秋やや遅く、ミズナラの根際に発生する（工藤, 2017）。採集記録が少なく、マイタケの白色タイプと混同されていることもあり、正確な分布は不明である。

(工藤伸一)

**イグチ目 ヌメリイグチ科****D**

和名 アミハナイグチ

学名 *Suillus cavipes* (Opat.) A.H. Sm. et Thiers

環境省：該当なし

本種は中型のイグチ型をしたきのこである。傘および柄は黄褐色で繊維状の細鱗片に覆われる。管孔は黄色。カラマツ林の地上に発生し、全国に広く分布する（今関・本郷, 1989）。

本県では、初秋に発生する（工藤, 2017）が、発生がカラマツ林に限定されており、現在青森市の郊外及び五所川原市の山林から採集されているだけである（工藤, 2018）。県内には植林されたカラマツ林が広く分布しており、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**タバコウロコタケ目 タバコウロコタケ科****D**

和名 ツヤナシマンネンタケ

学名 *Pyrrhoderma sendaiense* (Yasuda) Imaz.

環境省：該当なし

本種は中型の多孔菌型をした有柄のきのこである。傘は腎臓形で、表面は初め全体黒褐色であるが、乾くと淡褐色となる。傘裏は管孔状で灰白色。柄は直立性。国内に広く分布するが、発生はまれである（今関・本郷, 1989）。

本県では秋、ブナの枯れ木や切り株に発生する（工藤, 2017）が、発生環境および発生基質がブナに限定されており、環境の変化によっては絶滅が危惧されることから、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**タマシヨレイタケ目 マクカワタケ科****D**

和名 ダイダイヒメアマミタケ

学名 *Antrodiella aurantilaeta* (Corner) T. Hatt. et Ryvarden

環境省：該当なし

本菌は小～中型の多孔菌型のきのこ。子実体は無柄で楔形～丸山形または半背着生。傘は半円形、しばしば横に連なる。傘表面は黄橙色～オレンジ色、乾燥すると退色し、ピロード状～ほとんど無毛。子実層托は管孔状、鮮橙色。

本種は夏～秋、ブナなどの広葉樹の倒木や枯れ木上に発生（工藤, 2017）し、本県では2009年に十和田市（旧十和田湖町）で初めて採集されたが、発生はまれ（工藤, 2018）であり、今後生息情報の収集が必要である。（工藤伸一）

**タマシヨレイタケ目 タマシヨレイタケ科 D****和名** カワキタケ**学名** *Panus torulosus* (Pers.) Fr.**環境省：該当なし**

本種は中～大型のヒラタケ型をしたきのこである。幼時、傘は紫褐色で幼時白のような形をしているが、のちヘラ状となり、表面は黄褐色、無毛平滑となる。全国的に分布するが、発生は比較的まれである（今関・本郷, 1987）。

本県では夏～秋、ブナなどの広葉樹枯幹や切株に発生し（工藤, 2017）、十和田市蔦周辺で採集されているが、採集報告は極めて少ない（工藤, 2018）。今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**タマシヨレイタケ目 タマシヨレイタケ科 D****和名** タマシヨレイタケ**学名** *Polyporus tuberaster* (Jacq. ex Pers.) Fr.**環境省：該当なし**

本種は中～大型で有柄の多孔菌型をしたきのこである。傘は浅い漏斗形をしており、表面は圧着した淡褐色の鱗片で覆われる。傘裏は管孔状である。柄は直立性。全国的に分布するが、発生は比較的まれである（今関・本郷, 1989）。

本県では、春～秋、ブナやミズナラの倒木や枯木上または地中の偽菌核から発生する（工藤, 2017）が、発生地が比較的限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧されることから、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ハラタケ目 ペニタケ科 D****和名** アカハツモドキ**学名** *Lactarius deterrimus* Gröger**環境省：該当なし**

本種は中～大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は淡橙黄色で淡青緑色を帯び、環紋は不明瞭。乳液は橙黄色で、空気に触れると青緑色になる。全国的な分布は不明。

本県では秋、ドイツトウヒの樹下に発生し（工藤, 2017）、本県では青森市内から採集されているだけであった（工藤, 2018）が、その後2018年の現況調査で八戸市郊外でも発生していることが確認されており、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ペニタケ目 ペニタケ科 D****和名** アカモミタケ**学名** *Lactarius laeticolorus* (Imai) Imazeki**環境省：該当なし**

本種は中～大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は橙黄色で不明瞭な環紋があり、ひだは淡橙紅色。乳液は橙朱色で空気に触れても変色しない。モミ属の樹下に発生し、全国的に分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では秋、アオモリトドマツの樹下に発生する（工藤, 2017）が、発生環境が自然林ではアオモリトドマツに限定され、環境の変化によっては絶滅が危惧される。発生が比較的稀で、今後、分布等の詳細な調査が必要である。（工藤伸一）

**ペニタケ目 所属科未確定 D****和名** ウスベニオシロイタケ**学名** *Taiwanoporia roseotincta* T. Hatt.**環境省：該当なし**

本種は中型の多孔菌型をしたきのこ。子実体は無柄～半背着生。初め柔軟で多汁な菌糸塊から傘を形成する。傘はほぼ円形から扇形、中央が浅く窪んだ丸山形。表面は初め白色で部分的に淡赤紫色をおび、のち淡褐色、ピロード状、中央にはしばしば粗毛をもつ。

本種は夏～秋、ブナの切り株上に発生し（工藤, 2017）、本県では2012年に八甲田代平で初めて見つかったがその後の発生が見られない（工藤, 2018）ため、発生情報の収集が必要。（工藤伸一）

**イボタケ目 マツバハリタケ科 D****和名** マツバハリタケ**学名** *Bankera fuligineoalba* (J.C. Schmidt) Coker et Beers ex Pouzar**環境省：情報不足**

本種は中型で有柄のハリタケ型のきのこ。傘は丸山形からほぼ平に開き、しばしば2、3が癒着する。表面は乾いて羊皮質の触感があるが鱗片はなく、淡肉桂色～材木色、周辺は白色。子実層托は針状で、初め白色のち材木色。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の情報不足に指定されているが、本県でも情報が不足しており、今後調査が必要である。秋、アカマツ林内の地面に発生するが比較的まれである（工藤, 2017）。（工藤伸一）

和名 シシタケ

学名 *Sarcodon imbricatus* (L.) Karst.

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本種は大型で有柄のハリタケ型のきのこ。傘は漏斗形で、中心はくぼむ。表面は淡茶褐色、大形で強く反り返った角状の鱗片を密生する。子実層托は針状、柄に垂生、初め灰白色のち暗褐色。柄は太短い。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているが、本県では情報が不足しており、今後調査が必要である。本県では秋、エゾマツなどトウヒ属の林内の地面に発生する（工藤, 2017）。

(工藤伸一)



## ③引用文献

- 本郷次雄 1974. 日本産きのこ類の研究(21). 植物研究雑誌, 49 : 294-305.
- 今関六也 1943. まひたけ属 *Grifola* S.F. Gray 東亜産さるのこしかけ科 (其一). 植物研究雑誌, 19 : 381-390.
- 今関六也・本郷次雄 1987. 原色日本新菌類図鑑 I. 保育社, 大阪. 325pp.
- 今関六也・本郷次雄 1989. 原色日本新菌類図鑑 II. 保育社, 大阪. 315pp.
- 環境庁 2000. 改定 日本の絶滅のおそれのある希少野生生物 植物 II (維管束植物以外). 自然環境研究センター. 429pp.
- 環境省 2010. 改定レッドリスト 付属説明資料 菌類. 28pp.
- 環境省 2015. レッドデータブック2014 日本の絶滅のおそれのある希少野生生物 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). ぎょうせい出版, 東京. 580pp.
- Kobayasi, Y. 1954. Sphagnicolous Fungi found in Ozegahara Moor. Sci. Res. Ozegahara Moor, 558pp.
- Kobayasi, Y. 1960. *Ascosparassis*, a New Genus of Discomycetes. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 46 : 43-46.
- 国立科学博物館 2014. 菌類の不思議 第2版 - 形とはたらきの脅威の多様性. 東海大学出版部, 神奈川. 223pp.
- 工藤伸一 2003. 菌類 (キノコ・カビ) の多様性. 青森県史自然編生物. pp.101-144.
- 工藤伸一 2004. 八甲田ブナ帯の高等菌類について. 甲蕁塾菌蕁研究会研究報告. 30pp.
- 工藤伸一 2005. 青森県産アカヤマタケ属菌について. 甲蕁塾菌蕁研究会研究報告. 20pp.
- 工藤伸一 2009. 東北きのこ図鑑. 家の光協会, 東京. 272pp.
- 工藤伸一 2017. 青森県産きのこ図鑑. アクセス21出版, 青森. 535pp.
- 工藤伸一 2018. 青森県産きのこ目録 2017年版. 菌蕁研究「甲蕁塾」. 60pp.
- 工藤伸一・長沢栄史 2003. 青森県で再発見された *Armillaria ectypa* について. 菌蕁研究所研究報告, 41 : 26-34.
- 工藤伸一・大谷吉雄・長沢栄史 1994. 日本新産種 *Ionomidotis irregularis* (クロムラサキハナビラタケ) について. 日本菌学会第38回大会講演要旨集, p62.
- 工藤伸一・手塚豊・米内山宏 1998. 青森のきのこ. グラフ青森, 青森. 288pp.
- Miller, O. K. Jr., J. Volk, & E. Bessette 1996. A new genus, *Leucopholiota*, in the Tricholomataceae (Agaricales) to accommodate an unusual taxon. Mycologia, 88 : 137-139.
- Nagasawa, E. 1995. A new poisonous species of *Boletus* from Japan. Rept. Tottori Mycol. Inst., 33 : 1-6.
- Nagasawa, E. & S.A. Readhead 1988. A new edible agaric from Japan : *Clitocybula esculenta*. Rept. Tottori Mycol. Inst., 26 : 1-5.
- 長沢栄史・有田郁夫 1988. *Hypsizygus ulmarius* (シロタモギタケ) および *H. marmoreus* (ブナシメジ) について. 菌蕁研究所研究報告, 26 : 71-78.
- 長沢栄史・工藤伸一 1992. 日本新産種 *Creolophus cirrhatus* (フサハリタケ - 新称) について. 菌蕁研究所研究報告, 30 : 69-74.
- 成田伝蔵 1990. 青森県産キノコ目録. 青森県生物学会誌, 27 : 1-25.
- 日本菌学会 (編) 2013. 菌類の事典. 朝倉書店, 東京. 717pp.
- 大谷吉雄 1982. 興味深い日本産チャワンタケ 2種について. 日本菌学会会報, 23 : 379-381.